

## 第四章 永禄四・五年の畿内合戦とイエズス会の畿内布教

はじめに

イエズス会宣教師の書翰には、邦文史料では明らかにし得ない情報も多数あり、当該期の国家・社会・文化等の解明には魅力のある史料といえよう。しかし、その一方で、宣教師の史料には誇張が多く、信用できないという向きもある。そのため、信憑性の面で疑わしい史料として忌避される傾向が、今なお根強く残っている。こうした批判のほとんどは、史料分析を行った上でのものではなく、ただフロイスの誇張した表現に注目して批判しているにすぎないが、宣教師の史料には多くの粉飾や偏見があることも事実である。従って、宣教師の史料を軽視すべきではないが、内容面の検討も行わずに安易に利用するのも問題で、十分な史料批判が必要なのである。

以上のような指摘は、すでに松田毅一氏が述べているところであるが<sup>51</sup>、それから数十年たった現在でも前述のような傾向がみられるということは、史料の内容的検討を引き続き行っていく必要性を示しているといえよう。松田氏はフロイス書翰の内容的検討を行い、多くの成果を挙げてきたが、その内容的検討を以下の方法によって行った。一、日本側の諸文献による検討、二、日本の史跡、遺物等による検討、三、フロイスの書翰と年報を「日本史」と照合すること、四、フロイス以外の南蛮人の記録をもつて検討することの四点である<sup>52</sup>。筆者も氏の手法にならい、さらに原文書の有無の確認、ない場合には諸写本の照合を行うことで、宣教師の書翰の内容を検討することにした。

本章では、その一つとして、一五六二年（永禄四年一月二六日）〜永禄五年二月六日）付、堺発、イエズス会員宛ガスパル・ヴィレラ書翰に見られる畿内合戦記事の内容的検討<sup>53</sup>を行うこととする。この記事を扱う目的は、一、こうした見聞による記事が正確なものであるかどうかを見極め、日本史の一史料としての価値を有するか否かを明確にすること、二、フロイス「日本史」にも同様の記事があるため、両史料を照合して異同を確認すること、三、この書翰には発信月日が記されていないが、畿内合戦記事を邦文史料と照合することで発信日の絞り込みを行うことの三点である。

### 一 畿内合戦情報伝達の背景

まず、畿内合戦記事の内容的検討に入る前に、この情報がいかなる状況下で、何の目的をもって記されたのか考える必要がある。

一五六二年付ヴィレラ書翰を見ると、昨年にも畿内から書翰を発信したとあり、今回の書翰はその後の出来事を伝えると記されている<sup>54</sup>。昨年発信したという書翰をエヴォラ版日本書翰集から探すと、一五六一年八月一七日（永禄四年七月七日）付、堺発、インドのイエズス会員宛ヴィレラ書翰<sup>55</sup>がそれにあたる。この書翰は、京都にいたるまでの経緯と將軍から禁制を得た記事、仏僧たちの妨害に関する記事を記した後、現在布教のため堺にしばらく留まっているという記事で終えている。

一五六二年付書翰はその後の動向が記されている。一五六一年八月に堺を訪れたとあり、堺での布教状況が語られた後、今回検討する畿内合戦記事が載せられている。その箇所には、ヴィレラが堺に来たことは、デウスが未知の危険から救ってくれたのだと述べていることから、畿内での合戦を宣教師達の生命に関わる問題として捉えていたことが分かる。また、合戦によって京都のクリシタン教界の維持が可能であるかどうか見極める必要もあったであろう<sup>⑤</sup>。イエズス会宣教師は將軍義輝から京都居住を認めた許可状を得てはいたものの、仏僧達による妨害などがあり、京都での布教活動は順調に進んでいるわけではなかった。こうした状況下で起きた畿内での合戦を、畿内布教担当の宣教師であるヴィレラは、教界維持に係わる深刻な問題として受け止めていたに違いない。

従って、本章で検討する畿内合戦記事は、畿内布教に関わる出来事として宣教師の間で認識されていたといえるだろう。そのため、この出来事を脚色する必要はないことから、入手した情報をそのまま書翰に書き記し、伝達したものと考えられる。

## 二 ヴィレラ書翰の諸写本との照合

次に、一五六二年付ヴィレラ書翰の原文書の有無、諸写本を確認しておきたい。原文書は残念ながら発見されていないが、写本の方はルイス・デ・メディーナ師によれば、次のものが挙げられる<sup>⑥</sup>。

- ①ローマ・イエズス会文書館ARSI, Jap. Sin. 4, ff.315-317v.(Port); ff.318-321v.(La0); ff.322-323v.(It); ff.324-327v.(It)
- ②アジエダ図書館BA, 49-IV-50, ff.534-536.(Port)
- ③リスボン国立図書館BNL, Fundo Geral 4534, ff.399-401.
- ④科学学士院図書館BACL, ff.196v-199.<sup>⑦</sup>
- ⑤エヴォラ版日本書翰集CI, Evora, ff.112v-115.

書翰全体の検討ではないため、全文の照合を行ったわけではないが、畿内合戦に関する記事については、語順や語句レベルでの違いはみられるものの、内容に大きな変化はみられない。そこで、ローマ・イエズス文書館所蔵のポルトガル語書翰を底本とし<sup>⑧</sup>、他写本と異なる箇所がある場合には明記する形をとることにしたい<sup>⑨</sup>。

## 三 内容的検討

本節では、内容的検討の作業を以下の手順で行う。まず、合戦の概要について説明し、エヴォラ版日本書翰集とフロイス「日本史」を史料として引用する。次に両史料の照合、邦文史料との比較検討を行い、ヴィレラ書翰の内容について分析する。

### 1 京都の包囲

ヴィレラ書翰にみられる畿内での合戦は、六角義賢・畠山高政が三好長慶に対して攻撃をしかけてきた記事から始まる。

#### 【史料1a】ヴィレラ書翰

こうして私が堺に来たことは、私が知らなかった危険から免れるよう望まれた主の御旨であったと信じております<sup>③</sup>。なぜなら、私の出発から一ヶ月後、都は四万の兵士に包囲されたからです。

*Esta minha vinda ao Sacai creio aver sido por mandado do Senhor, que me queria tirar dos perigos que eu não entendia. Porque hum mes depois de minha partida foi o Meaco cercado de quorenta mil homens.*<sup>(12)</sup>

#### 【史料1b】フロイス「日本史」

「<sup>13</sup>として堺に移った」とは、司祭が知らなかった危険から免れさせるためのデウスの御摂理でありました。なぜなら、彼が都を立ち去ってから一ヶ月後、四万の兵士が市を包囲したからです。<sup>(13)</sup>

*Esta hida do[sic] Sacai foi ordenada por Deos para o Padre tirar dos perigos, que elle não entendia. Porque hum mez depois de sahido do Miaco, cercarão 40 mil homens a cidade.*

両史料の内容はほぼ同じであるといつてよい。両者の大きな違いは書翰では一人称で記されているのに、「日本史」では三人称となっていることぐらいである。しかし、このことは全く問題とするものではない。両者の原文を見ても、表現の仕方で微妙に異なるもの<sup>④</sup>、「日本史」はヴィレラ書翰で用いられている語句をそのまま使用している箇所が多く、フロイスはヴィレラ書翰をもとに【史料1b】を執筆したといえる<sup>(14)</sup>。

それでは、内容に入っていきたい。四万の兵士が京都を包囲した時期は、ヴィレラが京都を出発してから一ヶ月後であるとする。本書翰には「一五六一年八月に私は堺に入りました (Em Agosto de 1561 entrei neste Sacai)」という記述があり<sup>⑤</sup>、前述した一五六一年の堺発ヴィレラ書翰の日付が八月一七日となっている。そこから、八月一日から八月一七日、和暦で永祿四年六月二〇日から七月七日には、すでにヴィレラは堺に到着していたことが分かる。その一ヶ月後に都が包囲されたのであるので、包囲された時期は、七月二〇日から八月七日の間ということになる。これを踏まえて邦文史料を見ると、『長享年後畿内兵乱記』に「七月二十八日、六角承禎父子出張于勝軍」とある<sup>⑥</sup>。ヴィレラ書翰から京都包囲の日を特定することはできないが、邦文史料の七月二八日という日付は、書翰から窺える七月二〇日から八月七日という時期と合致する。

次に、四万の兵が京都を包囲したという点について考えてみたい。京都包囲については、先ほど引用した『長享年後畿内兵乱記』に六角義賢・義治父子が勝軍地藏山に陣したとあることから、【史料1】はこのことを述べているといえよう。ただ、四万という数は少し多いように思われる。『細川両家記』には「二万余騎」とあり、半数である。書翰にある四万という数は、おそらく六角軍だけではなく、同時に軍事行動を起こした畠山高政の軍も含んだ人数と思われる。宣教師の記事はこのあと六角軍の情報ではなく、畠山軍の情報

を伝えているので、宣教師は京都を包囲とするものの、実際はもっと広範囲のことを指していると考えた方がよいだろう。

## 2 両軍の衝突

京都が包囲された記事の後、ヴィレラは堺の安全性について記している。堺では騒乱がなく、平和に暮らしており、日本で最も安全な場所であると伝えている。そのあと、六角・畠山軍を迎え撃つため三好軍が出陣し、何度かの戦闘の結果三好方が敗北したという記事が載せられている。該当箇所を引用する。

### 【史料2a】ヴィレラ書翰

都の市 (a cidade do Miaco) が包囲された時、(都を)<sup>(28)</sup> 統治していた者 (o que a governava) 「三好義興」の叔父「三好実休」から援軍を得ました。彼「三好実休」によって暴虐的に領国を奪われた公爵 (principe) 「畠山高政」が彼を迎え撃つため出陣しました。(彼は) 同盟を結んでいる根来 (Nengoros) と称する僧院の仏僧達を引き連れてきました。この者達「仏僧達」は、およそロードの騎士団のようなものです。これら両軍勢、すなわち都を治めていた領主 (senhor que regia o Miaco) 「三好義興」の叔父の軍と仏僧達が属した軍は堺 (Sacay) の市と都の間に陣営を構え、たえず大小の戦闘を行いました。この小競り合いや合戦で常に仏僧達が勝利しました。(中略) それから、二十日後仏僧の側が勝利して追撃の際敵を多数殺したからです<sup>(29)</sup>。都を治めていた者「三好義興」はこれを恐れ、市を放棄して自分が頼りとしていた城に退きました。こうして市は敵に略奪され、その一部が焼き払われました。

Em ho cerquo foi socorida a cidade do Meaco por hum tio do que a governava, ao qual saio ao encontro hum principe a quem ele tiranicamente tinha tomado o reino. O qual em sua companhia trazia huns bonzos de huns mosteiros com que se confederou, os quais chamao nengoros. Aremedaõ estes algum modo aos comandadores de Rodes, e destes falarei a Iguna cousa abaixo. Estes dous exercicios se poseraõ entre a cidade do Sacai e Meaco, e sempre contendiaõ entre si, pouquo ou muito. Scilicet, o do tio do senhor que regia Meaco e o outro em que vinhaõ os bonzos. Em estas escaramucas e recontros os bonzos sempre foram vencedores... porque dali a vinte dias, ficando a parte dos bonzos vencedora, no alcanca e acolheo a huma fortaleza em que confiava, e assim foi a cidade saqueada pelos inimigos e queimada parte dela.<sup>(20)</sup>

### 【史料2b】フロイス「日本史」

当市を統治していた領主 (senhor) の叔父から援軍を得ました。彼によって暴虐的に領国を奪われた公爵 (principe) が彼を迎え撃つため出陣しました。彼「侯爵」は、根来と称する仏僧達を傭兵として引き連れてきました。彼ら「仏僧達」は、ヨーロッパのゲルマン (兵) のようなものです。これら両軍勢は、堺の市と都の間に陣営を構え、たえず小競り合いがあり、仏僧たちが属した側が常に勝利しました。(中略) それか

ら、二十日以内に、仏僧の側が勝利して追撃の際多数の者を殺したからです。都を治めていた者はこれを恐れ、市を放棄して自分が頼りとしていた城に退きました。市の一部は略奪され、焼き払われました。<sup>(21)</sup>

...a cidade, a qual foi socorrida de hum tio do senhor que a governava, ao qual sahio ao encontro hum príncipe, a quem elle tiranicamente tinha tomado o reino, o qual trazia em sua companhia alugados huns bonzos a que chamão nengoros, que são como os tudescos em Europa.

Estes dous exercitos se puzerão entre a cidade do Sacay e Miaco, e sempre tinham algumas escaramuças, e o em que vinhão os bonzos sempre vencia... porque dentro de 20 dias, ficando a parte dos bonzos vencedora, matarão muitos no alcañe. Com este temor, o que regia o Miaco, deixou a cidade e se recolheu a huma fortaleza, em que confiava, e foi parte da cidade saqueada e queimada.

両史料の原文を見ると、両軍勢の小競り合いを伝えた箇所は「日本史」の方に省略が認められるが、それ以外はほぼ同文である。【史料2】も「日本史」はヴィレラ書翰を引用、部分的に要約して載せたと考えられる。

内容に入りたい。まず前半部分にみられる人物の比定を行おう。引用した史料にはすでに注として人物をあてているが、その根拠を示す必要がある。まず、「(都を)統治していた者」であるが、これは三好義興のことである。長慶か義興かで迷うところであるが、そのあとの文(後述する【史料3】)にこの人物の父親の記述があることから、義興としなければならぬ。もし長慶とすると、その父元長はすでに死去しているので意味が通じなくなる。次にその叔父についてであるが、これは三好実休(義賢)で正しい。実休は長慶の弟で、義興の叔父にあたるので、「都を統治していた者の叔父」という説明と合致する。

「領国を奪われた公爵」<sup>(22)</sup>は、根来衆を率いたという記述があることから畠山高政である<sup>(23)</sup>。高政は高屋城主で河内を領していたが、三好の攻撃にあい、堺に落ちのびた<sup>(24)</sup>。その後の高屋城主は三好実休である。このことから、書翰にある三好実休に「領国を奪われた」という記述は十分領けるところである。

次に両軍が堺と京都の間で陣営を構え、小競り合いがあったという記述についてである。邦文史料によると、両軍は岸和田近辺で対陣し、三好実休は久米田に陣をとっている<sup>(25)</sup>。岸和田の地は堺より南に位置しており、ヴィレラ書翰にある京都と堺の間で対陣という記述は当てはまらない。しかし、【史料2】を見ると、実休は義興の援軍として出陣したとあり、後半にも義興の記事が記されていることから、畿内全体の情報として捉えた方がよいように思われる<sup>(26)</sup>。そうすると、三好義興が梅津に、松永久秀が西院に陣しているの<sup>(27)</sup>、京都と堺の間という記述も理解できる。ヴィレラは実休と高政の合戦と畿内全体の情勢とを混同して記したのではなからうか。続いて、大小の戦闘があったという記述も、邦文史料にみられる<sup>(28)</sup>。それらの中で大規模な戦闘といえ、久米田合戦と呼ばれる合戦である。この戦闘によって、三好実休が討死している。ヴィレラ書翰の「つねに仏僧達が勝利」したという記述は当を得ているといえよう。

そのあと、三好方の敗北によって三好義興が京都を放棄して、自分の頼りとする城へ退

いたという記事がある。これも『長享年後畿内兵乱記』に「同（永禄五年三月）六日、三好筑州・松永弾正少弼至山崎被取退」と書かれており、義興は山崎に退いたことが分かる。

【史料2】は合戦の場所で若干史実と異なる箇所があるが、その他は邦文史料と合致し、内容は信用できるものといえる。

### 3 三好方の反撃

書翰によれば、三好実休戦死をはじめとする三好方の敗北によって、京都では略奪や焼き討ちがあつたことが伝えられている。三好と六角・畠山軍の戦闘の最中に、ヴィレラはロレンソを京都に派遣し、京都の教界維持に努めたが、その時將軍義輝の義兄弟が教会借用の許可を將軍から得たという出来事や、仏僧達の教会強奪の画策があつた（このことは後述する）。最終的には両方も事なきを得たが、三好方の敗北が京都での布教活動に影響を与えた様子が窺える。

こうした記事のあと、再び三好と畠山の合戦記事が載せられている。その戦いで三好方が勝利し、先の久米田合戦の敗戦で失った勢力を再び取り戻した。書翰の該当箇所を引用しよう。

#### 【史料3a】ヴィレラ書翰

勝利者達はこのような破壊の後、都を治めていた者（o que regia o Misco）【義興】の父「三好長慶」がいたたいへん強固な城の攻略に専念し、息子【義興】のことは構いませんでした<sup>66</sup>。そのため、彼【義興】は都を去った時に退いた別の城におり、入念に二万人の兵とその他必要なもの（を集めて自軍を）立て直し、彼と敵との間にある大河を密かに渡りました。彼は全く気付かれることなく敵の不意を衝いて襲撃しました。敵陣には三万の兵がいたにもかかわらず、彼らは壊滅的な打撃を受けて敗走しました。この両軍、すなわち都を治めていた者の軍と、城中にいた彼の父の軍は合流し、絶えず敵を追撃して多数を討ち取りました。都に到ると、そこにいた敵や他の敗残兵と戦闘になりました。敵は前述の（三好方の）勝利に恐れをなしたのであえなく敗れました。こうして、戦勝者達は、多少破壊されてはいたものの市を奪回しました。

Depois deste desbarate se ocuparão os vencedores em combater huma fortaleza muy forte em que estava o pai do que regia o Meaco, descuidando-se do filho. Pelo que ele, estando na outra fortaleza onde se recolhera quando se saio do Meaco, prudentemente se refes de gente até vinte mil homens, e do mais necessário, e secretamente passou hum grande rio que estava entre ele e os enemigos. Não sendo nunqua sentido, deu neles estando descuidados, e posto que no araijal dos contrários avia trinta mil homens, forão todos desbaratados e postos em fugida. E ajuntando-se estes dous exércitos, scilicet, do que regia o Meaco e de seu pai que estava na fortaleza, vierão sempre em ho alcance dos enemigos, fazendo grande mortandade neles, até chegarem ao Meaco, aonde tiverão outra batalha com os enemigos que nele estavam e com os que da outra fugirão. Aos quais a vitória passada causou tanto terror que forão facilmente vencidos. E assim recuperarão os vencedores a cidade, ain

da que algum tanto destrugada.<sup>(30)</sup>

【史料3b】フロイス「日本史」

勝利者達はこの勝利の後、都を治めていた者の父がいたいへん強固な城の攻略に専念し、息子のことは構いませんでした。(息子は)都を去った時に退いた別の城におり、極めて入念に、約二万の兵とその他必要なものを(集めて自軍を)立て直し、彼と敵との間にあつた大河を密かに渡って行きました。彼は気付かれることなく、敵の不意を衝いて襲撃しました。敵陣には三万の兵がいたのもかわらず、彼らは壊滅的な打撃を受けて敗走しました。ついで父子の軍勢は合流して敵を追撃して敵に大いなる損害を与え、都に到ると、市にいた敵や敗残兵と戦闘になりました。敵は前述の(三好方の)勝利に驚き、恐れをなしたのであえなく敗れました。こうして、先の敗戦者は今や戦勝者となり、多少破壊されてはいたものの市を奪回しました。

Depois deste victoria se occuparão os vencedores em combater huma fortaleza mui forte onde estava o pay do que regia o Miaco, descuidando-se do filho. O qual estando em outra fortaleza, onde se recolheu quando sahio do Miaco, com grande diligencia se refez de gente, que serial[m] como 20 mil homens de guerra, e do mais que lhe era necessário; e secretamente passou hum grande rio, que estava entre ele e os inimigos, e não sentido, deu nelles descuidados, e posto que no arrayal dos contrarios havia 30 mil homens, forão desbaratados e postos em fuga. E ajuntando-se os exercitos do pay e do filho, seguirão o alcans e fazendo nelle grande estrago, ahé chegarem ao Miaco, aonde tiveram outra batalha com os inimigos, que na cidade estavam e contra os que da outra fugirão; aos quaes a victoria passada cauizou tanto terror e espanto, que facilmente forão desbaratados. E assim os venci dos a primeira vez, sendo agora vencedores, recuperarão a cidade, ainda que algum tanto destrugada.<sup>(31)</sup>

両史料の大きな違いはみられないが、違いを挙げるならば以下の三点である。第一に、二万の兵士と軍備を集めたという箇所では表現の仕方が異なる。第二に、三好長慶と義興の軍が合流するという箇所では書翰の方が詳細である。第三に、先の敗戦者が今は戦勝者となったという箇所では、エヴオラ版日本書翰集と他写本、フロイス「日本史」ともに表記が異なる<sup>(32)</sup>。ただ、これらは内容が異なるわけではなく、表現が違うといったレベルのものである。他は細かい部分で省略や書き換えがある程度で、基本的には【史料3】も「日本史」はヴィレラ書翰をそのまま引用したといえる。

それでは、内容を見ていこう。勝利者達が次に城攻めを開始した記事があり、その城は「都を統治していた者」の父の居城であるという。これは畠山高政が三好長慶の居城飯盛山城を攻撃したことを指しているといえる。『長享年後畿内兵乱記』に「同(永禄五年二月)十日比、(中略)畠山高政・安見<sup>直政</sup>・根来衆等困飯盛城」とあり<sup>(33)</sup>、ヴィレラ書翰の内容と合致する。そのあと書翰には義興が兵を立て直し、密かに大河を渡って畠山軍を不意打ちした記事があるが、これも邦文史料で確認できる。同じく『長享年後畿内兵乱記』に「五月十四日、為飯盛城後巻、三好筑前<sup>義興</sup>・松永弾正<sup>直政</sup>・松山・池田衆・伊丹・安宅<sup>直政</sup>・阿州衆二万余被渡河、同二十日合戦、高政・安見<sup>直政</sup>・根来衆敗軍」とある。『細川両家記』にも

同様の記述があり、三好軍が渡河した川は「渡辺川」であったことが分かる。五月二〇日の合戦も「五月廿日に河内の教興寺と云処に紀州の湯川方、根来寺衆陣取所へ切懸合戦有」と書かれており、ヴィレラ書翰にある合戦とは教興寺の戦いであったことが判明する。

後半部分を見ていこう。長慶・義興軍が合流して、都に至りそこで戦闘になったことが書かれている。邦文史料を見ると、畠山軍を追撃した記事<sup>(66)</sup>の後は畿内の諸地域を奪還したことが記され<sup>(67)</sup>、特に京都に進撃して六角軍と合戦したという記事は見られない。しかし、教興寺の戦いの後に義興は長慶のいる飯盛山城に行ったであろうし、六角軍のいる京都をそのままにおかなかつたはずである。その後六角軍が京都から退いていることから考えても、三好軍が京都で何らかの軍事行動をとったと考えた方が自然である。後半部分は邦文史料に見られない記事も含まれているが、十分あり得る内容のものであると思われる。

#### 4 三好と六角の和睦

三好方の勝利によって、再び畿内は三好長慶の支配するところとなった。一方、六角義賢は三好と和睦して坂本に退いた。この三好と六角の和睦に関する記事がヴィレラ書翰にもある。

##### 【史料4 a】ヴィレラ書翰

敗走した者達は、これ以上の打撃を受けることを恐れて和睦 (pazes) を求め、都を治めていた者 (o que regia o Miaco) は公方 (Cub6) がこの「六角と三好の戦争」仲立ちに入ったため、いっさいを承諾しました。(公方は) 名誉 (honra) に関することだけは日本全国の君主 (senhor de todo o Japão) ですが、権力 (poder) や領国 (Reino s) などでは他の者達が勝っております。

Os que escaparão, temendo mais dano do que foi o passado, pederão pazes e concerto. Tu do lhes concedeo o que regia o Meaco, porque entreveio niso o Cubo, que hé senhor de todo o Japão nas cousas que toquão hà onra somente, que no poder e reino outros lhe levão aventajem.<sup>(66)</sup>

##### 【史料4 b】フロイス「日本史」

敗走した者達は、これ以上の打撃を受けることを恐れて和睦を求め、都を治めていた者は公方様がこの仲立ちに入ったため、いっさいを承諾しました。(公方様は) 名誉に関することだけでは日本全国の君主 (o senhor de todo Japão) でしたが、権力や領国においては彼を凌ぐ者は他に多数いました。

Os que escaparão, temendo mais dano, pedirão pazes e tudo lhes concedeo o que regia o Miaco, porque intreveio nisto o Cubosama, que era senhor de todo Japão nas couzas que tocoão à honra somente, que, no poder e reino, outros lhe levão a ventajem.<sup>(67)</sup>

両者の違いは、將軍の評価に関する箇所、書翰では現在形で記されているが、「日本史」では過去形となっている点である。しかし、これは問題とするものではない。他の箇所はほぼ同文であるので、内容面で両者の違いはないといえよう。



では、内容に移る。畠山軍の敗走により、六角軍も近江に帰国する記事が邦文史料にもみられる。『細川両家記』に「江州六角衆此時迄勝軍山に在陣候つれ共、此時無異儀帰国候也」とある。ヴィレラ書翰にあるように和睦して退いたということは、『御湯殿上日記』の永禄五年六月二日条に「左きやうの大夫と、みよしくわほくにて、せうていも四しもさかもとへかへる」とある。ただ、これが將軍義輝の仲介によるものかどうかは、残念ながら邦文史料からは管見に触れなかった。

最後に、將軍に対する評価である<sup>⑧</sup>。ヴィレラが將軍に初めて謁見した頃は、將軍を実質権力者として評価していた<sup>⑨</sup>。しかし、この書翰では名譽のみの権力者という表記になっている。こうした將軍の身近で起きた合戦を武力によって押さえることができなかったため、ヴィレラはこのような評価をしたのであろう。以後宣教師の書翰には、將軍に対して天皇同様名譽のみの権力者と記されている。

以上、畿内合戦に関する記事を四つの場面に分けて、内容的検討を試みた。その結果、フロイス「日本史」はヴィレラ書翰をそのまま引用、部分的には要約という形で載せていることが判明した。また、書翰の内容は邦文史料と合致する点が多く、日本史の一史料としての価値を有すものであることが証明された。

#### 四 畿内合戦と畿内布教

第一節でヴィレラが畿内合戦に関する記事を書き認めた理由について触れたが、この畿内での合戦が畿内布教にどう影響を与えたのかという点について、もう少し考察する必要があるだろう。そこで、ここではヴィレラ書翰に記載されている畿内合戦中の畿内布教について考えてみたい。

前節【史料2】で述べた両軍の小競り合いの最中、京都では反キリシタンによる京都の教会への妨害があったことが書翰に記されている。該当箇所を引用しよう。前節と同様にフロイス「日本史」も引用する。

##### 【史料5a】ヴィレラ書翰

これらの軍「両軍」がこのような（状況）であった間に（都の）包囲に隙が生じ、私には不可能なことであったので、ロレンソという日本の修道士<sup>⑩</sup>をかの地「都」に派遣しました。彼はキリシタン達とともに降誕祭<sup>⑪</sup>をできる限り盛大に行いました。その後、万事を整えキリシタン達を励ましてこの堺に戻りました。この時、国王の義兄弟（*condado del Rei*）である都の一領主（*hum dos senhores do Miáco*）が（自分の信奉する）悪魔（*diabo*）に唆され、数カ月間借用するとの名目で、我達の教会に住む許可（*licença*）を国王（*Rei*）から得ました。このことはキリシタンに少なからずの動揺をもたらしました

Emquanto isto passava entre estes exércitos deu o cerquo lugar a poder mandar lá hum ir mão japão chamado Lourenço, por eu não poder. O qual com os christãos celebrarão a festa do Natal como melhor poderão, e depois se veio pera o Sacai, deixando tudo lá ordenad

o e animados os cristãos. Neste tempo hum dos senhores do Meaco, cunhado del-rei, movido pelo diabo ao que se cree, ouve del-rei licença pera morar na nossa igreja, com prete isto de a ter de luger por alguns meses, o que não deo pouqua trovação aos cristãos.<sup>(42)</sup>

#### 【史料5b】フロイス「日本史」

このような(状況)であった間に(都の)包囲に隙が生じ、司祭はロレンソ修道士(Irmão Lourenço)を都に派遣することが可能になりました。そこで(ロレンソ)は(都に赴き)、キリシタン達を激励し、彼らとともに降誕祭を祝った後、堺に戻りました。この時、公方様の義兄弟(cunhado do Cubosama)である都の一領主(hum dos senhores do Miaco)<sup>(43)</sup>が、悪魔(demonio)に唆され、宿泊のためといって、我達の教会に住む許可を得ました。このことはキリシタンに少なからずの動揺をもたらしました。

Emquanto isto passava, deu o cerco logar para poder o Padre mandar o Irmão Lourenço a o Miaco, e depois de ter animados os cristãos, e feita com elles a festa do Natal, se tornou para o Sacai. Neste tempo hum dos senhores do Miaco, cunhado do Cubosama, movido pelo demonio, houve licença pera morar na nossa igreja com pretesto de a ter dapouzena daria, o que não deo pouca turbção aos cristãos.<sup>(44)</sup>

両史料とも同内容であるが、フロイス「日本史」はヴィレラ書翰を簡潔にまとめている観がある。その一方で、書翰では「国王」としているのを、「日本史」では「公方様」としており、「日本史」によって判明する箇所もある。

内容を見ていくと、將軍義輝の義兄弟にあたる人物が京都の教会を宿舍として借用する許可を將軍から得たという記事がある。これは【史料5】にも書かれているようにキリシタンに大きな動揺を与えたことであろう。ヴィレラは將軍義輝から禁制を得て<sup>(45)</sup>、「寄宿」が「堅被停止」ることが約束されていた。しかし、今回のことは將軍自ら禁制を無視したことになる。宣教師は將軍の禁制があてにならないものであると判断したに違いない。それだけでなく、畿内地域で有力な保護者と判断した將軍自身が信用できないと判断したかもしれない。最終的にはこの件は、親キリシタンの領主が干渉したため実行に移されることはなかったが、ヴィレラはこうした事柄の決定権が將軍にないことを痛感したと思われる。前節の【史料4】にみられる「將軍は名誉のみの君主」という評価もこうしたことが原因になっているといえよう。

また、京都では仏僧の妨害もあったことが書翰に記されている<sup>(46)</sup>。しかし、これも親キリシタンの異教徒の尽力によって、京都の教会が奪われるようなことはなかった。

最終的には、將軍の義兄弟という人物にも仏僧にも教会は奪われずに済んだが、今回のように混乱に乗じて京都の教会を奪取しようという動きがあり、宣教師は度々そうした危機に直面していた。反キリシタンの多い京都での教界維持の困難さを物語っている。

こうした京都での状況と対照的に堺の安全性について語られている。宣教師達は京都で身の危険が生じると、京都を離れて堺に避難する行動をとっている。本書翰には、「日本全国において、この(堺の)<sup>(47)</sup>市ほど安全な場所はなく、他の国々にどれほど騒乱が起きようとも、当地においては皆無であります(Não há lugar en todo o Japão mais seguro que esta cidade, e por mais alvoroços que em os outros reinos aja, nela nunqua os há)」とある<sup>(48)</sup>

に<sup>⑤</sup>、宣教師の間で堺を避難所として認識していたことが窺える。畿内布教担当の宣教師は、堺を唯一安全を保証できる場所と理解していたのである。

## おわりに

以上、一五六二年付ガスパル・ヴィレラ書翰にみられる畿内合戦記事の内容的検討を行った。この検討から明らかにした点を挙げよう。まず、畿内合戦記事が正確か否かという点である。これは、本章で検討してきたように、邦文史料とも合致しており、日本史の一史料としての価値を有するものといえる。

次に、フロイス「日本史」との関連性についてである。本章で検討した結果、本書翰の引用部分においては、「日本史」はヴィレラ書翰をそのまま引用もしくは要約したものと判断してよい<sup>⑥</sup>。しかも「日本史」では固有名詞で書かれている部分もあり、書翰では明らかにできないところを補うことができる。

続いて、書翰の発信月日の絞り込みを行っていこう。本書翰の畿内合戦記事の中で、六角義賢が三好方と和睦して京都を退いた記事が、『御湯殿上日記』永禄五年六月二日条に記されていることはすでに述べた。ヴィレラはその記事を書翰に記しているのであるから、書翰は永禄五年六月二日、西暦一五六二年七月一日以降に書き認めたことになる<sup>⑦</sup>。ではヴィレラはいつまで堺にいたのだろうか。一五六三年四月二七日付、堺発、インドのイエズス会員宛ガスパル・ヴィレラ書翰に「一五六二年の九月、（すでに通信した通り）当時からこつていた合戦が終わった後、私は堺に一年間滞在していたので、都を目指して出発し、同地に到着すると、キリシタン達により多大な歓喜をもって迎えられました（O ano de mi I e quinhentos sesenta & dous, no mes de Setembro, acabada (como lhes escrevi) a guarra, que naquelle tempo ouve me parti pera o Miaco, por aver hum anno que estava no Sacay, onde ch egando fui recebido com muita alegria dos Christãos.）」とある<sup>⑧</sup>。一五六二年九月に京都へ向けて堺を出発したとあるので、一五六二年の堺発書翰はそれより以前でなければならぬ。以上から、本書翰は一五六二年の七月三日から九月三〇日の間に発信されたことになる。

最後に畿内布教と畿内合戦記事の関係についてまとめたい。宣教師が畿内での合戦を伝達したのは、単に畿内で起きた大事件であったからではなく、畿内布教に大きく関係する出来事であったからである。本書翰には畿内での合戦に乗じて京都の教会を奪取しようとする動きがあり、戦争状況が畿内での教界維持に影響を与える様子が書翰から読みとれる。つまり、絶え間ない合戦は日本でのキリスト教布教の大きな障害であり、宣教師の生命の危険にさらされる出来事だったのである。フロイスが領主達の野望に基づく絶え間ない戦争が日本でのキリスト教布教の最大の障害の一つであると書翰で伝えているが<sup>⑨</sup>、まさにその通りであったことが本章での検証結果から明らかになったといえるだろう。